

演題番号 4

自立高齢者における口腔機能、栄養状態および身体的フレイルの関係

○澤田ななみ¹⁾、竹内倫子²⁾、江國大輔³⁾、森田学³⁾

¹⁾岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野

²⁾岡山大学病院歯科・予防歯科部門

³⁾岡山大学学術研究院医歯薬学域予防歯科学分野

【目的】

これまで、口腔機能と栄養状態、栄養状態と身体的フレイルに関するそれぞれの報告はあるが、口腔機能、栄養状態および身体的フレイルの関係を同時に調査した報告は少ない。本研究では、自立高齢者における口腔機能、栄養状態および身体的フレイルの関係を検討することを目的とした。

【方法】

2017年11月～2019年1月に岡山大学病院予防歯科外来を受診した60歳以上の患者203名（男性63名、女性140名）を対象とした。診査項目は、年齢、性別、全身疾患、現在歯数、機能歯数、歯周ポケット深さ、アタッチメントレベル、舌背細菌数、口腔湿潤度、舌圧、舌口唇運動機能〔オーラルディアドキネシス(ODK)〕、咀嚼能力、咬合力、嚥下機能、栄養状態、身体的フレイルとした。これらの関係について、構造方程式モデリングを用いてパス図を作成し、媒介分析を行った。有意水準は5%とした。

【結果】

構造方程式モデリングの結果、ODKの回数が多いと栄養状態が良好であり、栄養状態が良好であると身体的フレイルの割合が少なかった。年齢はODK、栄養状態および身体的フレイルと関連がみられた。モデル適合度は良好であった(CFI=1.000、TLI=1.000、RMSEA=0.000)。媒介分析の結果、ODKと身体的フレイルの総合効果は有意であった($p=0.045$)。栄養状態を媒介変数とした時、ODKと身体的フレイルの直接効果は有意でなく、間接効果は有意であった(-0.043、95%信頼区間:-0.110, -0.006)。

【考察】

過去の報告と異なりODKと身体的フレイルに直接の関連がみられなかった。その理由として、これまではODKとフレイルとの関連を評価する際に栄養状態を考慮していない研究が多いのに対して、本研究では栄養状態の介在を考慮したことが考えられる。ODKと身体的フレイルは、直接ではなく、栄養状態を通して間接的に関係した可能性が示唆された。

【結論】

自立高齢者において、ODKは直接的に栄養状態と関係し、間接的に身体的フレイルと関係した。